

年 表：文字改革のあゆみ

この年表は、上の記事を補うために、新中国成立から今日までの約30年間の中国語学界の歩みを、特に文字改革を中心にとどめてみたものである。また、改革の成果として、主に文字改革出版社の出版物を書き込んである。

原稿は、上野・大塚が意見を交換し合ったうえで、大塚が執筆したが、初めての試みであるため、思わぬ誤りも多いと思われる。お気付きの点をお知らせ下されば幸いである。

(大塚秀明)

<1949年>		ソビエト言語学界を支配していたマール学説批判。言語には階級があるという誤りを批判し、ソシュール以来の考えに戻したにすぎなかったスターリンの指摘も、中国の言語運動に携わっている人々に与えたショックは大きく、以後の運動の方向に大きく影響した。『馬克思主義和語言学問題』という単行本になる。
10月	中華人民共和国の成立とあい前後して清末から歩み初めた語文運動グループが統一戦線を結成し、その新しい動きが北京と上海にみられた。	
9月	上海新文字工作者協会の成立。 倪海曙を中心とするラテン化新文字運動。機関誌『新文字月刊』、他にも多数のテキストと理論書の出版。	9月 語言研究所「スターリン論文と中国語研究の関連」について座談会。 胡喬木、語法研究の当面の重要性を指摘。51年6月の『人民日報』社説につながる。
10月	中国文字改革協会の成立（北京）。 国内各地から北京に集まった語文工作者の協会。呉玉章を主席とし、漢字の整理と簡化の研究、北方語で中国語を統一するための基礎的研究など五項目の研究課題を提出。	
<1950年>		9月 上海『大公報』発表の民族語をめぐる論争。やはりスターリン論文が契機となる。
3月	科学院に語言研究所設置。 所長；羅常培。発足は6月。 1928年国民政府下で発足した中央研究院旧歴史語言研究所、南京解放前に台湾に移る。	<1951年>
7月	李立三、スターリン論文を翻訳紹介。 「論語言学中的馬克思主義」（言語学におけるマルクス主義について）	
5月	中国文字改革研究委員会籌備会。 漢字の整理・簡化をめざす。	6月 『人民日報』（6.6）社説。 「正確地使用祖國的語言，為語言的純潔和健康而鬭爭」（祖国のことばを正しくつかい、ことばの純潔と健
6月	『人民日報』（6.6）社説。 「正確地使用祖國的語言，為語言的純潔和健康而鬭爭」（祖国のことばを正しくつかい、ことばの純潔と健	

康のためにたたかえ)を掲載するとともに、呂叔湘・朱德熙「語法修辭講話」の連載を開始。半年続く。 10月 『語文學習』創刊。	康のためにたたかえ)を掲載するとともに、呂叔湘・朱德熙「語法修辭講話」の連載を開始。半年続く。	語の文法に対する従来の根本的誤りの是正、体系の不備を補填。 ★この年1951年に着手された『新華字典』が出版される(魏建功・責任編纂)。
<1952年>-----	<1954年>-----	
2月	中国文字改革研究委員会成立。 中国文字改革協会は發展的解消。上海の新文字工作者協会も委員会の方向に協力。表音文字の研究、漢字の整理と簡化、表音文字の教学方法研究などを主要任務とする。教育部所属、主任；馬叙倫，副主任；吳玉章。	3月 『光明日報』に「文字改革」欄。 3月17日の第1回以降、隔週水曜日掲載。1966・4まで。(1958年10月以降一時中断。1960年7月再開。)
5月	李栄詒『北京口語語法』。 趙元任 Mandarin Primer (1948)の訳。『語法修辭講話』とともに文法研究に大きな影響を与えた。	12月 中国文字改革委員会成立。 今までの「研究」の二字が落ちて國務院の直屬機関となる。草案の発表、座談会・会議の主催などの実行の時期に入る。主任；吳玉章，副主任；胡愈之。
6月	常用字表(2,000字)公布。	<1955年>-----
7月	『中国語文』創刊。 中国文字改革研究委員会、語言研究所の合同による。第143期(1966年6月22日)まで続く。	1月 『光明日報』横書きに。 漢字簡化方案(草案)発表。 簡体字798，簡化偏旁54，廃止異体字400。大部分は“約定俗成”の原則による。
★よく引かれる毛主席の“文字必須改革，要走世界文字共同的拼音方向(文字は改革しなければならず，世界の文字に共通の表音の方向に進むべきである)”という指示は、『中国語文』の創刊号に，「中国文字改革研究委員会成立会開会辞」として載っている。		2月 拼音方案委員会の設立。 漢字簡化の草案を発表し終えた文字改革委員会のなかに設けられた。 5月 漢語規範化問題座談会。 北京在住の学者・工作者ら40名参加。10月の会議にむけての準備。 7月 『語文學習』誌上に主語賓語問題についての論争。 今までに出されているいくつかの句の分析法の混乱を整理かつ問題点を深化させる。
<1953年>-----		
10月	品詞論争はじまる。 『中国語文』1952，9～11掲載のコンラッドの「論漢語」(中国語には品詞がないという従来の考えに反駁するもの)への反論として高名凱「關於漢語的詞類分別」を発表。中国	9月 中国文字改革文献資料展覧会。 北京図書館にて。(9.5～16) 10月 全国文字改革会議開催さる。 漢字の簡略化，普通話の普及，横書きの普及などを決議。漢語拼音文字

10月 12月	(拉丁字母式) 草案初稿についても 討論。(10.13~27, 教育部との共催) 現代漢語規範問題学術会議開催さる。 上の会議にひき続き, 党・政府の責 任者や外国の言語学者もまじえて開 かれ, 普通話の規定(北方語を基礎 方言とし, 北京語音を標準音とする), 普通話普及のための方言の調査・研 究, 各種の出版計画などを決議。(10. 25~31, 科学院哲学・社会科学部主 催) 56年7月この会議の『文件匯編 』(科学出版社) 出版。 第一次異体字整理表の発表。 (『あゆみ』)	育出版社, 学校文法体系の確立。 馬建忠以来の研究成果を総括し, 集 体討論にもとづく「暫擬漢語教学語 法系統」を具体化した教科書。第四 冊は10月。 6月 漢字簡化方案第二表の二度目の認定。 95字が正式使用に移さる。 8月 『PINYIN 拼音』発刊。 ローマ字つづりの研究と実験を目的 とする。 “ 漢語拼音方案(草案) 修正。 「關於修正漢語拼音方案草案の初歩 意見」(修正第一式, 修正第二式)。 9月 拼音文字史料叢書。 盧戡章『一目瞭然初階』など十数冊。 清末の漢字改革の資料集。 10月 漢語拼音方案(草案) 修正第一式の採 用を決定。 12月 『語言研究』発刊。 第4期(59年9月)まで発行される。
<1956年>-----		
1月 “ 2月 “ “ “ 4月	『人民日報』をはじめ, 新聞・雑誌が 横書きになる。 漢字簡化方案の公布。(1.28) 三つの表からなる。(『あゆみ』) 方案の第一表(230字)と偏旁応用字 (30字)を正式使用。 最初の認定。4回(59.7)まで続く。 中央推广普通話工作委员会成立。 主任; 陳毅, 副主任; 吳玉章ほか7 名。国务院が普通話普及についての 指示。“大力提唱, 重点推行, 歩歩 普及”(大いに提唱し, 重点的に推 し進め, 一步一步普及させる) 漢語拼音方案(草案) 発表。 55年10月の漢語拼音文字(拉丁字母 式) 草案初稿をうけたもの。全国で 草案に対する討論はじまる。 『中国語文』誌上にて唐蘭論文批判。 「マルクス主義理論と中国文字改革 の基本的問題を論ず」をめぐる討論。 のちに人民内部の矛盾として解決。 初級中学課本『漢語』第三冊。人民教	<1957年>----- 5月 陳夢家, 陶坤らの文字改革批判。 文字改革は官僚主義等の攻撃。 6月 『拼音』誌上にラテン化反対, 文字改 革反対の論文掲載。 康即「私は民族形式の表音文字を主 張する」。周妙中「私はなぜ表音文 字採用に賛成しないか」など。 “ 文字改革反対派への反撃。 曹伯韓「章伯鈞や羅隆基が文字改革 をテーマに文章を書くのはなぜか」 『人民日報』(6.3) 8月 『拼音』を『文字改革』に改称。 右派分子に誌上を利用されたことを 反省し, 文字改革に関する基本的問 題の宣伝, 討論をすすめる。曹論文 を転載。文字改革についての10項目

10月 ” 11月 12月	のアンケート調査。のちに『文字改革筆談』として出版（58・6月）。 普通話異読詞審音表初稿（正編）。普通話審音委員会により「本国地名審音表初稿」とともに発表。 漢語拼音方案の修正第一式を更に修正した案を決議。 人民政治協商会議全国委員会にて。 漢語拼音方案，國務院全体会議にて可決。（翌58年2月公布） 少数民族言語の文字改革。 「關於少数民族文字方案中設計字母的五項原則」の批准。	★この年毛主席の指示“一切幹部要学普通話”（すべての幹部は共通語を学ばなければならない）。周報告，吳報告などを収めた『中国の文字改革』（外文）出版。（9月）
<1958年>----- 1月 2月 ”	周恩来報告。「当前文字改革的任務」政治協商會議全国委員会での報告。三項目の任務。（㊦「あゆみ」） 吳玉章報告。「当面の文字改革と漢語表音案についての報告」（2・3） 周報告の三つの柱をうけたもの。 漢語拼音方案正式承認。（2・11） いずれも第一期全国人民代表大会第五回會議において。この方案の公布は「最近60年間における中国人民の漢語表音字母創造の総括」（吳玉章，黎錦熙）。	<1959年>----- 7月 ” 9月 10月 12月 「推行注音掃育和推广普通話」（注音による文盲一掃を推し進め，普通話を推し広める）経験を総括。吳玉章からの祝電。60年3月，この會議の『資料匯編』出版される。
4月 5月 9月 12月	『方言與普通話集刊（第一本）』出版。中華書局『方言和普通話叢刊』とともに方言と普通話の対応法則をつかみ学習効果を高めようとするもの。全八冊。 漢字簡化方案第二表の3度目の認定。70字が正式使用に移さる。 「外国国家名称拼写法」64年10月に修正稿あり。 『漢語拼音詞匯』63年12月に増訂版あり。	<1960年>----- 2月 3月 4月 7月 『漢語方言概要』出版。 袁家驊らによる7つの方言についての概説。以前のハンドブックの類とちがい，かなりまとまった概説書。 中国文字改革視察日本學術代表団訪中。団長；土岐善麿。 『言語生活』7月号に倉石武四郎氏との訪中談話。 「關於推广注音識字的指示」中共中央からのもの。 『光明日報』に「文字改革」欄7月28日創刊，隔週水曜日，1966年4月13日，第135回まで続く。

★この年の3月、毛主席“這種拼音字很好，你們好好學習”（この種の拼音ローマ字はとてもよい、しっかり勉強するように）と指示、最近よく引用される。

<1961年>-----

11月 周有光『漢字改革概論』出版。
64年に修訂本。

<1962年>-----

7月 『新華字典』（1962年修訂重排本）
4回の認定を経た簡体字を採用するが、偏旁の簡化は未採用。（→64年3月の連合通知）

9月 『漢語方音字匯』出版。
2700余字について全国17ヶ所の読み方を示す。

12月 普通話異読詞審音表初稿（第三編）。
59年7月の続編に続くもの。

<1963年>-----

2月 普通話異読詞三次審音総表初稿。
57・10，59・7，62・12 の三度にわたる審音の総まとめ。単行本は10月。
（『あゆみ』）

8月 『普通話轻声詞彙編』出版。
第二音節が本来の声調を失っている語約1,000を収める。

12月 『漢語拼音詞匯（増訂稿）』出版。
58年12月の初稿の2万語から5万9千語に。

<1964年>-----

3月 「關於簡化字的連合通知」
簡化字の偏旁としての使用方法の明確化。中国文字改革委員会・文化部・教育部による連合通知。

5月 『簡化字総表』
56年の方案公布以来の総まとめ。（『あゆみ』）

5月 郭沫若「日本の漢字改革と文字の機械

化」（『人民日報』5・3）

5月 『漢語方言詞匯』——方言の語彙研究。
北京大学語言学教研室編。905項目について、各方言地区ではどう言うかを載せる。これで、『概要』『字音』『語彙』の3部がそろふ。

9月 周有光『漢字改革概論』（修訂本）
61年11月本の修訂。

10月 「外国国家名称拼写法（修正稿）」
58年9月初稿。

12月 「印刷通用漢字字形表」
文化部との共編。（『あゆみ』）

<1965年>-----

1月 『普通話異読詞審音檢字』（程養之）
63年の審音総表を字形で檢字ができるように四角号碼配列にしたもの。

5月 少数民族語地名的漢語拼音字母音訳転写法（草案）。
国家測繪総局と中国文字改革委員会との合同発表のもの。ウィグル語、モンゴル語・チベット語の三つの方語について。（→76年6月）

<1966年>-----

4月 『光明日報』「文字改革」欄停刊。
第Ⅰ期 54・3～58・10（119）

第Ⅱ期 60・7～4月13日（135）

5月 『文字改革』停刊。（57・8～）
5・6合併号（126・127期）まで。

“ 『漢字正字小字彙（初稿）』出版。
63年の審音結果と64年の簡化字総表に基づく。（『あゆみ』）

6月 『中国語文』停刊。（52・7～）
第4期（143期）まで。（78年5月復刊。）

★この年、中国文字改革委員会主任の呉玉章が死亡。1978年の『光明日報』にその為人を紹介する記事が連載されている。（5・19，6・

2, 6.16) (1878. ~ 1966. 12. 12) <1967 ~ 70年>----- ★この時期、中国文字改革委員会の出版活動とか、座談会の開催などはなかったようであるが、大衆の間における文字改革は大きく前進したと推測できる。すなわち、漢字の簡化についていえば、 ①今までの伝統との決裂を顕示するために簡体字の使用。 ②文字を持たなかった（持たなくとも生きてゆけた）人々が、自分の意志を表わすために発言のメモや大字報を書く際の、大胆に簡略化された文字を使用したなど。 また、普通話についていえば、 ①“共通語”（たとえば、『毛主席語録』、革命的スローガン等）の普及。 ②人的交流（解放軍内の教育、“取経”、“長征”等）の活発化など。 以上のような理由が想像できよう。 <1971年>----- 3月 周総理の談話。（藤山愛一郎氏との会見における） 中国も将来はローマ字のような表音文字にする。『いっぺんに天に登ることはできない』というから、表音文字の活用は21世紀になるでしょう。 6月 周総理の談話。 中国の簡化字は、人民の要望があるかぎり、まだふえるだろう。将来はローマ字にすることが望ましいと思うが、それも人民の意志によることだ。いまのところは、中国人民はなお漢字に愛着を感じている。 “ 『新華字典』（1971年修訂重排本）部首索引。後に四角號碼索引版も出る。 <1972年>-----	3月 郭沫若書簡。 『紅旗』第4期。（『あゆみ』） <1973年>----- 3月 毛主席、『光明日報』の「文字改革」欄復活を批准。 数ある専門欄のうちで最も早い。 5月 『光明日報』「文字改革」欄復活。（5.10）（『あゆみ』） 毎月2回、10日と25日。後に75年9月12日第57期より隔週金曜日に変更。 7月 中国文字改革委員会活動再開。 54年の成立後、数々の成果を挙げてきた委員会も文化大革命のなかで活動停止。この月、周総理がこの名称で再び活動開始に同意するとの指示を出す。 12月 普通話普及の推行を準備。 王福堂「漢民族共同語的歴史」（『人民日報』12・7）。漢字簡化のみに終始する傾向を批判し、普通話普及の重要性を強調。 <1974年>----- 3月 漢語拼音廣播講座の開始。 中央人民廣播電台と中国文字改革委員会の連合事業。（3.15～4.3）後に各地方の放送局から再放送。 5月 中国地名漢語拼音字母拼写法の制定。 中華人民共和國国家測繪総局との共同事業。七ヶ条からなる。 〔例〕黒竜江／省、泰／山、周口店 少数民族語の地名については76年6月（65年5月の草案）。 “ 中国人名漢語拼音字母拼写法の制定。 <1975年>----- 2月 文部省中国文字改革調査団の訪中。 団長；林大。『言語生活』6月号に輿水氏との訪中談話。報告書未見。
--	--

5月	中国文字改革委員会，第二次漢字簡化方案，草案を国務院に上提。 「四人組」粉碎後の報道によると，当時文教の権をにぎっていた張春橋がこの草案を2ヶ月放置し，進行を妨げたという。		中国文字改革委員会による説明と第一表，第二表とからなる。一般の新聞には12月20日に掲載。
8月	中国語教育活動家連合訪中。 団長；香坂順一。中国文字改革委員会委員（葉籟士，周天行，陳乃華，孫修章，喬風，申堅）と座談会。報告書，『第一回訪中報告（1975年8月）』（77年9月）。	7月	計量单位名称用字の整理。 国家標準計量局との共同作業。
9月	『光明日報』「文字改革」欄隔週金曜日に変更。（第57期より） 『光明日報』の数種の「専刊」整理のため。	8月	第3回国連地名標準化会議。（アテネ） 「中国語の表音文字でつづった中国地名を国際的なローマ字標準つづりとする」決議を採択。
<1976年>-----		10月	『語文學習（叢刊）』の創刊。 上海人民出版社による。
6月	少数民族語地名漢語拼音字母音訳転写法の制定。 1965年5月の草案を受ける。国家測繪総局との合同発表。	12月	『人民日報』『光明日報』などに草案が発表される。 （以下「あゆみ」）
7月	3,200字あれば足りる。 『人民日報』（7.18）「反撃右傾翻案風 加速漢字改革」（『新中国年鑑』1977年版・参照）	<1978年上半期>-----	
9月	中国地名漢語拼音字母拼写法（修訂） 74年5月のものの修訂。	2月	『東京新聞』記者，（中国文字改革委員会喬風・申堅両氏へのインタビュー） 『朝日』・『日経』にも（2.8付） 日中両国の略字の共通化，草案後の反響などについて述べる。
10月	「四人組」粉碎。「文字改革」欄で展開された「四人組」批判の焦点は次の通り。 ①75年5月の草案を握りつぶす。 ②30年代の大衆語の考え方。 ③少数民族語政策の妨害。 ④簡体字に反対し，これを軽べつした，等。	4月	言語学研究発展計画座談会開催。 55年の学術会議以来の規模，29の省・市・自治区65単位の代表が参加。 呂叔湘が主宰，胡喬木が書面談話。 （蘇州にて4.14～20）
<1977年>-----		5月	『中国語文』復刊。 隔月刊。1966年6月の第143期に続く。
5月	第二次漢字簡化方案（草案）	〃	漢語拼音広播講座（11課構成） 従来の10課に，放送を学ぶにあたってという1課が加わる。王力，周有光，徐世榮の3氏出席。 ★3月に黎錦熙（国語運動家，『新著国語文法』などの著者）没。